

本を選ぶ

NO.416 2020年(令和2年)1月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

- <ろん・ぼわん>藍
- 映画『ニューヨーク公共図書館』を観た人たちは何を想ったのだろうか
- 戦後74年間の出版データを見る
- 日本のパレエ教育を変えた幻のパレエ学校
- 悲しき、品切れと絶版本 ②

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

藍

暮れから正月にかけて、なぜだか決まって懐古的な気分になる。たとえば新しい本よりも過去に読んだ本や、ツンドクの憂き目に遭っている本たちが気になったりするのだ。背や表紙を眺めては、図書館の書架で出会い、本屋さんの店頭で手にした当時の思い出され、そのあれやこれやにとりともなく浸る。

入手の理由がすぐには分からない本もある。『青の歴史』（ミシェル・パストゥロー／松村恵理・松村剛訳／筑摩書房／2005年）がそうだ。著者は色彩の専門家ではなく紋章学の研究者。前著『王を殺した豚 王が愛した象』は、人間の歴史と文化を彩った動物をテーマにした力作だ。エデンの園の蛇やトロイの木馬、ハンニバルの象、デューラーの犀、ミッキーと دونالد、はたまたクローン羊ドリーまでも取り上げて動物たちのドラマで読ませる。しかし、この『青の歴史』は読みそびれていた。

ばらばら頁をめくっているうちに、うっすらと経緯が蘇る。紺屋の話から、藍つまりブルーについて知りたくなったのだ。そこまではたどり着いたが、問題はどの紺屋の話なのか？

松が取れる頃になってようやく思い当たった。『貴婦人と一角獣』（トレイシー・シュバリエ／木

下哲夫＝訳／白水社／2013年／白水Uブックス）の作中に登場した紺屋がきっかけだった。作者トレイシー・シュバリエは前作『真珠の耳飾りの少女』が一躍世界的なベストセラーとなり、映画化もされた。以来フェルメールの絵はあちこちで見掛けるようになった。その彼女の並々ならぬ力量がこの『貴婦人と一角獣』においても巧みな構成と史実を組み合わせた確かな描写で発揮され、読者を中世ヨーロッパの貴族社会や織物職人たちの世界に引き込む。「視覚」「聴覚」「味覚」「嗅覚」「触覚」の五感をテーマとして織り込まれた実在するゴブラン織りの壁掛けを題材とする歴史小説。そこに表現された一角獣と貴婦人の図柄は、謎めいた構図はもちろん、赤と青の美しさに包まれている。

作中に登場する機織り職人ジョルジュ・ド・ラ・シャペルの娘アリエノールは、取引先の藍染め職人に嫁がされるのを逃れようと、必死になる。それは藍の染料を作り出す過程で不可避免的に発生するおぞましいほどの悪臭のせいだった。“あの臭い——藍を定着させるときに漬ける発酵した羊の尿の臭気——があるために、紺屋は何世代も前からいとこ同士しか結婚できなかった”。（164頁）五感をテーマにしたつづれ織りを織り上げる物語に登場する目の不自由な娘は、人より何倍も「嗅覚」が鋭い。そして「聴覚」や「触覚」さらに「味覚」だって鋭敏だ。

当時の藍の製造にこんな歴史があるのなら、藍について知らねばならぬ。それにしても美しい青に糸を染めるのに羊の尿が必要とは……。 (埜村 太郎)

映画『ニューヨーク公共図書館』を観た人たちは何を思ったのだろうか

小笠原 清春

図書館（勝手に）応援キャンペーンをやってみた

昨年5月に上映が開始されてから既に8カ月。この原稿を書いている2020年1月頭時点では全国で6つの映画館が上映中乃至は上映予定となっている（内2館はアンコール上映だ）が、自主上映会を入れればその数はもっと増えるはず。息の長い大ヒット映画、それが『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』だ。

- ・前評判が<+5>と<-5>に分かれていて心配でしたが、<+100>でした。全然眠くならず。
- ・ナレーションなし BGMなし
それだけに際立つ人の言葉、物の音。
「築地ワンダーランド」に少し似ている。
- ・かつての生徒の高校1年生の女子と観てきました。彼女は司書をめざしていますが、私にとってもちょっと難しかったです。もう少し、レファレンスのシーンがみたかったです。
- ・図書館が身近に感じられる映画です。
日本の図書館の映画を待ちます。

図書館案内的な内容を期待すると裏切られてしまう。何しろ、ナレーションなし、BGMなし、伏線なし、山場なし、おまけに途中休憩が入るほど長いドキュメンタリー映画なのだから。それにもかかわらず、この映画を観に来る人たちは、どんな人たちなのだろう。そして、どんな感想を持ち帰ったのだろうか。

そんな疑問への回答を求めて、「図書館を友とする市民の会」を名乗る有志で始めたのが、[映画『ニューヨーク公共図書館』を観て図書館を応援しよう]というキャンペーンだった。図書館の映画について語り合うことから、一生の友となる図書館を手に入れる方法に話がつながればという思いから、映画の感想と図書館への応援メッセージを書き込む「掲示板」を持って、埼玉県内をウロウロと行脚することに。

- ・9月14日～27日：川越スカラ座ロビーに設置
『ニューヨーク公共図書館』上映とのコラボ。
- ・12月15日：さいたま文学館（桶川市）に設置

「図書館と県民のつどい埼玉」関連展示で参加。

- ・12月24日～28日：深谷シネマロビーに設置
『ニューヨーク公共図書館』上映とのコラボ。

最終的には125人の方々が、掲示板への書き込みに応じて下さった（他に、インターネット上に設置したWeb掲示板への書き込み11人ほど）。キャンペーンもとりあえずは一段落したので、頂戴したメッセージの一部を紹介させて頂く。

ニューヨーク公共図書館が見せてくれたこと

- ・図書館は人！知識を得たいと思う人々のもの
この言葉が心に残ります
- ・「必要な面倒事を続けよう」図書館には続けていって欲しいです！
- ・「目的」「役割」を問うて「方法」を常に考える
会議が凄い！
- ・この映画、今回で3度目です！
「図書館とはいかにあるべきか」をまっとうに遂行している。その芯の通った活動姿勢が本当にうらやましいと思います。
- ・『どんな業務も住民の受益に繋がっている』
身につまされました。
- ・公共図書館の役割が多方面にわたっていることにオドロキました。図書館員の心意気にとても感激しました。

ナレーションは皆無の映画だが、その代わりに、スタッフ達の言葉が印象的で心に残った。

頂いたメッセージでも、人の問題、職員（スタッフ）の情熱、活気、積極性、熱意に触れたものが多い。

また組織文化はどう作られるべきなのかも、様々な会議シーンを通して見えてくる。一人ひとりのスタッフが自分の仕事を分析して考え、積極的に意見交換する。民主主義はそうした反復で作られて行くものだということが分かる。

日本でも同じような形で映画を作ってほしいものだが、この会議シーンが一番撮れない（成り立たない）部分かも知れない。そうしたことに思い当たる



左：「図書館と県民のつどい」案内／中：「つどい」に掲示板出張／上：深谷シネマ外観／下：深谷シネマのロビー

のか、会議シーンに驚嘆している方も多かった。

『ニューヨーク公共図書館』で観客が発見したものは、日本の図書館では見えていない（見られない、見せられない）ものなのだろうか。

図書館を作る人々への注文と応援

- ・日本の図書館を作る人、行政、政治、すべての人たちに見せたい。
- ・こういう図書館を埼玉県につくろう！！
- ・「すごい」「日本には真似できない」と思ってるだけじゃダメだ。
- ・学びたい人に寄り添える図書館。学びから遠い人にも近づいていける図書館。そんな場所にするべきでは。傍観者ではいけませんね。
- ・日本の図書館でも皆同じようなこと努力してやってますヨネ。もっと知って欲しいですネ。
- ・日本の図書館の管理委託にはかなり問題を感じます。
- ・「地域とのつながりの大切さ」日本の図書館の活路を示していると思いました。
- ・日本の図書館もっと挑戦して下さい
- ・もっと人生に身近な図書館をつくりたいですね。
- ・プロの図書館員の増員を！ 予算措置も
- ・図書館に行こう！！そして図書を大切に！！

私達は図書館によって充実した毎日を送っている。地域でもり上げましょう！！

キャンペーン実施の作戦会議では、県内の図書館長たちに、この映画を観たかどうか尋ねようかという話も出た。結局は立ち消えになったが、館長に限

らず県内の図書館で働く人たちで、映画を観た人の数はどの位だろうか。あるいは地方議員の方たちはどうなのだろう。伝手がある方には働きかけをお願いしたいものだが。

映画を観た方々へお願いしたいのは、そこから得た感動やアイデア、あるいは志を持ち帰り、働いている図書館、利用している図書館に、何らかの形で還元してもらいたいということだ。

この映画で、私たちは、人が人らしく生きるのに手を差し伸べ、暮らしの中から生まれたあらゆる精神活動に応えられるのは、図書館において他に無いということ再認識したはずだ。

この映画で、私たちは、まともな図書館を手に入れるためには、まずは、きちんとした人の配置と予算措置が必要だということを知ってしまったはずだ。その実現のためには、図書館で働く人、図書館を使う人が一緒に考えて行くことが必要とされるだろう。

今回のキャンペーンを通して、そうした機運の存在を探り当てられたような気がしている。

(おがさわら きよはる)

●なお、125人の方々からのメッセージは整理した上で、今後、「図書館を友とする市民の会」ホームページ <https://mi6eg.crayonsite.info/> (右記QRコードも) で閲覧できるようにします。



また2つの映画館、埼玉県内の図書館にも、その成果を還元したいと考えております。

戦後 74 年間の出版データを見る

—『平成出版データブック 「出版年鑑」から読む 30 年史—』—

能勢 仁

平成は区切りよく 30 年です。上中下期に分けて分析しました。天候に準えると上期は快晴、中期は晴れ後曇り、下期は土砂降り、時々薄日でした。出版物が最高に売れて年は平成 8 (1996) 年で、書籍・雑誌が 48 億冊買われました。読書人口 8 千万人で割ると、日本人は一人 60 冊の本を購入したのです。中期になると返品率が上昇し本が売れなくなりました。

平成 12 (2000) 年にアマゾンが日本にやって参りました。当初、流通機構の買収を図りましたが、失敗しました。一電子書店としてスタートしましたが、定価の値崩れなしの環境と日本人の蔵書癖に助けられ成長しました。今では日本一の売上です。

その頃不振であった児童書を救った本が「ハリー・ポッター」です。今でも売られています。平成出版史の救世主といっても過言ではありません。自費出版の台頭も平成中期の産物です。火付け役の新風舎は自滅してしまいましたが、自費出版ブームは本格化し、今日まで継続されています。

平成下期の特色は取次業界の受難です。取次は業界の中核機能として重要な機関です。すでにこの兆候は中期に現れていました。中期には地方取次、専門取次の倒産が激増しました。

総合七大取次と言われたのは過去のことで、今ではトーハン、日販の二大取次になってしまいました。時々薄日と表現したのは、コミックが少しずつ回復していることです。平成 25 (2013) 年は電子書籍元年が宣言され年です。電子書籍、雑誌の新しい展開が注目され始めました。

本書の最大の出版意義は、鳥澁がましいことですが 1945 年～ 2019 年の戦後 74 年間の出版データが完全に繋がったことです。すでに皆様方の図書館では蔵書されている『出版データブック 改

訂版 1945 → 2000』(出版ニュース社刊)の追加に等しい出版物が本書です。つまり筆者は「出版ニュース社版」を手本にして、同一フォームで著述を致しました。具体的には、年度版の業界 10 大ニュース、ベストセラーズ、出版統計、文学・文化賞のデータは総て出版ニュース社刊行の『出版年鑑』から引用したものです。

もし、図書館で前記の本を所蔵されていませんでしたら、今からでも注文されれば入手できます。是非『出版データブック 改訂版 1945 → 2000』を備えて頂きたい思います。

30 年間の分析で分ったことのいくつかを記してみます。現在出版業界をリードしている上位 50 社のうち、45 社・90%の出版社は明治・大正時代に創業されて版元です。老舗版元は経験を活かして時代対応が上手です。公共図書館の貸出冊数は、平成 30 年は 6 億 6519 万冊です(出典:「日本の図書館 2018」日本図書館協会)。書店店頭

での書籍販売冊数は 5 億 7129 万冊です。電子書籍の売上 321 億円から類推しますと約 2 億冊相当になります。これだけの本が市中では読まれています。我が国の出版物の国際性は極めて低いです。イギリスは売上 4,779 億円のうち 54.7%は輸出です。次に高い国はフランスで、23.9%です。日本は 1.1%と低いです。これは日本語という言語が輸出の障害になっています。出版市場を拓げるためには書籍・雑誌の多言語化が必要になります。

出版業界は大手出版社中心の販売傾向になりつつあります。個性的な中小出版社の本が読者の手に届かなくなることを憂うものです。大量の宣伝、デジ広告、パブリシティが大手版元に偏らぬことを願うのみです。救済策として、各社のコラボ戦略を業界として研究してゆきたいものです。

(のせ まさし:ノセ事務所)



『平成出版データブック—「出版年鑑」から読む 30 年史—』/能勢仁著/A5 判並製/206 頁/定価本体 2,500 円 + 税/ミネルヴァ書房/2019 年 10 月刊

日本のバレエ教育を変えた幻のバレエ学校

—『「バレエ大国」日本の夜明け チャイコフスキー記念東京バレエ学校 1960-1964』—

内山 夏帆

「バレエはイタリアで生まれ、フランスで育ち、ロシアで大人になった」と言われます。ヨーロッパはもとより、英国やアメリカ、南米でも盛んに行われ、次にアジアの時代が来るだろうとも言われています。

現在、日本人の若いバレエダンサーたちが、国際的なコンクールで上位入賞することは珍しくなくなりました。けれども、吉田都や熊川哲也といった日本人ダンサーが、本当の意味で「世界で活躍」しはじめたのは、ここ30年ほどのことです。

戦後、日本に一大「バレエ・ブーム」が来て、たくさんのバレエ教室ができましたが、それらは「お嬢様のお稽古事」の域を出るものではありませんでした。

そんな日本のバレエ教育を変えた歴史的な転換点が、1960年から4年間だけ、東京の世田谷区に存在した「チャイコフスキー記念東京バレエ学校」だったのです。

サンクト・ペテルブルグへの留学経験もある著者、斎藤慶子さんは、膨大なロシア語の文献を読み解き、関係者への丹念なインタビューによって、歴史に埋もれ、忘れ去られていた幻のバレエ学校の存在を掘り起こしました。当初は博士論文として書かれたものでしたが、公益財団法人日本舞台芸術振興会（東京バレエ団）の協力のもと、戦後日本のバレエ教育史を俯瞰する一般書としてまとめられたのが本書です。

1950年代、冷戦下の米ソの文化外交政策によって、競うように有名バレエ団が来日し、公演が行われました。特に、1957年のボリショイ劇場バレエ団の初来日は、観客のみならず、日本のダンサーたちにも衝撃を与えました。

「このボリショイの舞台に比べ、私たちはなんと貧相なのだろうか。なにが違うのだろうか？ 国家の補助がないためか？ 大衆の支持がないため

か？ 伝統の欠如のためか？ 共産主義でないためか？」（本文より、バレエ演出家・川路明の言葉）こうした機運の中、翌1958年には日本バレエ協会が設立され、1960年には「チャイコフスキー記念東京バレエ学校」が、日本初の本格的なバレエ教育機関として数々の理想をかかげ、ソ連の文化政策の一環として開校しました。

生徒の中には、小さな子供から、すでにプロと

して活躍していたバレエダンサーも含まれていましたが、ソ連文化省から派遣されてきた教師たち、スミラフィ・メッセレルとアレクセイ・ワルラーモフの二人は、日本人が踊るのを見て「日本にはバレエがない！」ときっぱりと言い切ったといひます。

徹底的に基礎を叩き込み、世界に通用するソヴィエト・バレエの技術を伝えること。ともすれば退屈な基礎練習の連続でありながら、学校は、学ぼうとする生徒たちの熱気にあふれていたといひます。

結局、ソ連の政策の変化に翻弄さ

れ、経営的にも困窮した学校はわずか4年で閉校してしましますが、ここから巣立った谷桃子、松山樹子、吉田矩夫、坂井鞆彦、木村公香といった踊り手たちが、やがて「バレエ大国」日本の礎となっていくのです。

ソ連バレエ成立の歴史的背景から日本における受容の過程、米ソ対立を背景とする東京バレエ学校の設立と、理事長となった政治活動家・林広吉の活動、クラス編成やアシスタント制度など、学校での教育内容にいたるまでが、一般の読者にもわかりやすく書かれており、詳細な参考文献のリストは研究者の参照にも耐えうるものとなっています。

バレエを愛するすべての人々にとって、本書が、今日の「バレエ大国」の“真の黎明期”を知る貴重な一冊となることを願っています。

（うちやま なつほ：文藝春秋）



『「バレエ大国」日本の夜明け
チャイコフスキー記念東京バレエ学校 1960-1964』斎藤慶子・著
／四六判上製／404頁／定価・
本体2,200円＋税／文藝春秋企
画出版部／2019年12月刊

悲しき、品切れと絶版本 ②

溝上 牧子

前回書いた、同タイトルの①で海外の契約期間について少しふれたが、なぜ、本は品切れになったり絶版になるのかを考えてみたい。品切れは明確だ。売れるペースを考えるとなかなか増刷に踏み切れない本がそれだ。内容が古くなって需要がなくなったものも同様。それらの本は品切れ…から絶版の道をたどることが多い。しかし時折奇跡的に、時代がその本を求めたり、熱心な書店員の売り方一つでめでたく品切れから復活する本もあるし、細々ながらも読者を見込める本は長らく品切れでも順繰りに再び日の目を見ることがある。

しかし絶版は品切れという可能性の残されたものとはちょっと違い完全に版元が権利を手放している本のこと。再び契約を結ばない限りはその会社から出ることはない。ただ誰かがその本に可能性を感じれば再び形をかえ版元を変えたりして出直すこともあるし、ほかの人にもチャンスが与えられる本と言ってよいだろう。

朔北社では通常著者と契約するときには契約期限を設けていない。でも独占するわけではないし、双方が何か問題を感じたときには話し合うという契約になっている。何も問題がない場合には基本的に年に一度自動的に契約は更新される。だが海外の著作権はほとんどが5年～長くても10年の単位での契約。更新契約ともなるともっと期間が短くなる。本が売れている時代にはそもそもあまり問題なかっただろうが、今のように初版を売切り、重版までもっていける本が減ってきている中で、この契約期限が大きな足かせになっている。採算があう本には追加の経費をかけられるが、そうでない本は切り捨てられる…いや切り捨てざる得ない現実があるのだということを読者にも知っていてほしい。一概には言えないが、現在では、そもそも契約期限と本の売れるスピードとの間に隔たりがある気がしている。契約が切れるということは、その本の権利を失う事。もし在庫が残っていても売ってはいけな。契約解除とともに販売権もなくなってしまうからだ。この問

題にぶつかったときにこれらの著作権の仲介に立つエージェントに今後の契約の改善を願い出たことがある。一定期間後、自社の契約のように自動更新できる契約に出来ないだろうか。しかしエージェントの答えは「NO!」だった。納得のいく説明をもらえたなら、悶々とした気持ちを抱えることにはならなかっただろう。聞くと「以前はそういう契約もあった」というではないか!

なぜその方法は廃れてしまったのか? それは作業の効率化を図るために、契約もマニュアル化されていったからではないかと私は勝手に想像している。ベースがあるのはいいことだが、それに引きずられすぎると良い発想が生れにくくなる。話し合いが最低限で済めば時間の節約にもなり効率もいいが、もう少し話し合う余地があってもいいのではと思う。話し合っ、互いの着地点を探る。一つ一つの本にはそれぞれの性格があり、一緒くたにすること自体ナンセンスだ。大体の基準はあっても、決まりではないはずだ。ビジネスなのにだれかが損をしてしまうようなことを求めているわけではない。疑問に思うことを言えない、その理由もはっきりしないことを何となくで進めていたら破綻がくるのではないかと思うのである。納得のいく理由があったり、方針があるなら聞こう。その条件を飲めるか飲めないかは会社の判断でいいだろう。

海外の本の著作権の事を考える場合には、自分たちが著作権を売る側に置き換えて考えてみるもいい。売る側にとっては著作権の取引をすることは二次的な収入源が増えるということであり、著者の収入も増える。損はない。著作権を買う=印税の前払いであり、保証金みたいなものである。その本を短期的にみるか、長期的に見るか…契約時に会社同士互いに話し合っおいてもいいのかもしれない。考えたり、伝えることで何かが変わる可能性があるならば伝えたい。泣く泣く絶版にする本を減らしたいと願いながら。

(みぞか みまきこ：朔北社)

「風の電話」と「森の図書館」

1月24日より公開の映画『風の電話』に先駆けて、7日付の朝日新聞夕刊に、岩手県大槌町の「風の電話」とそれを囲むメモリアルガーデンについての記事が掲載されました。

東日本大震災で会えなくなった方と話が出来るようにと、電話線のつながっていない電話ボックスを民家の庭に置き、その周りに図書館や遊び場を整えて一般に開放されてきた「ベルガーディア鯨山」が、10年目を迎えているとあります。

「風の電話」については、設置者である佐々木格さんのご著書『風の電話―大震災から6年、風の電話を通して見えること―』（風間書房 2017年）や、いもとようこさんの絵本『かぜのでんわ』（金の星社 2014年）をお読みになった方もいらっしゃることでしょう。早期に会社勤めを辞めて田舎暮らしの夢を叶え、高台の土地で何でもご自分で作るという自然回帰の生活をされていた佐々木さんが、亡くなった従兄への想いをきっかけに、遺族と亡くなった方の想いをつなぐために設置準備を進めていた「風の電話」。完成直前に大震災に見舞われ、大切な人を失った人々の気持ちに寄り添えるものをと、遺族の方々に向けて開放されました。

また、同時進行で石を積んで作られていた「森の図書館」は2012年に完成し、全国から3,000冊もの寄贈本が集まったとか。震災で学校や図書館が流されてしまった子どもたちが本を楽しめる「場」として、また美術展やイベントを開催する「場」、人々が交流できる「場」として親しまれているそうです。独自の活動を続けてこられたこの図書館には、多くの方が注目されてきていますが、佐々木さんが3年の歳月をかけてほとんどお一人で作られたという石積みの建物もいつか拝見したいものです。

この10年の間に、延べ3万人もの人々が「ベルガーディア鯨山」を訪れたそうです。苦しみや悲しみを抱えた人々にそっと寄り添うような「場」であるようにと、佐々木さんご夫妻は整備や運営に尽力されてきました。朝日新聞の記事は、映画の公開でさらに訪れる人が増えるだろうとしながら、存続への不安も紹介しています。というのも、佐々木さんは最近、体力の衰えを感じているようで、度々体調を崩し、昨年は作業中に足を負傷して入院したこともあったとか。佐々木さんのお仕事を手伝う人や引き継いでいける人がこれから必要となってゆくのでしょうか。（LAS探検隊）